

平成元年十二月十日 和敬塾予餞会記念講演

「日本人の体質と近未来への展望」

上智大学教授 渡部昇一先生

今日はお招きにあがりまして大変光栄に存じております。

私も学生の時、日本で六年間、ドイツで二年半、イギリスで半年、寮の生活を体験しました。何処の誰とも分らない人と隣に住む訳ですから、非常に苦勞もあります。しかし、そのうちに我慢することも知って来ますし、人を見る目も多少はできてくる。振り返ってみれば、人間として多少スケールが大きくなると思います。今は、七十年安保の紛争以来、国公立の学校では寮は全滅であります。私立もこの頃は寮を造りません。寮生活ができる日本の青年はほとんどなくなりました。その点、皆さんは、何百万人もいる日本の学生の中で、こんなに恵まれている人たちは、一万人の学生に一人いるかどうかだと思います。

ところで今日の話題であります、人間がそれぞれ個々の体質を持っているという事は皆知っております。やせた人も太った人もいる

訳です。これは急には変わらない、急に変えようとする、コロリと死んだりします。以前私と共同研究をやっていた早稲田の教授は、急に太りまして、奥さんがダイエット病院に連れて行きました。そうしたら体重が下りはじめ、非常に頭が冴えてきた感じがしまして、体重が落ちるということはこれほど心身壮快にするものかと思われたようです。そして、この病院がせつかく出す食事でも水洗トイレから流していた。實際上、断食みたいになった訳です。それで、コロリと亡くなりました。そういう例は非常に多いです。大宅壮一さんもそうです。あの人は、マスコミ界の王者でしたが、肉が好きで太っておりまして。それで周りがそんなに太ってはいはいけませんと、肉ではなく蒟蒻を一食懸命食べました。そして、やせました。やはりコロリと亡くなりました。体質を急に変えるという事は、非常に危ないんですね。

二、三年前、ジョギングをやっているうちに急に亡くなられた方がおりました。それでジョ

ギング中に死んだ人を新聞で見ていると、みなさん、四十歳前後で始めて十年、十五年とやっていたらつしやる。ところが十年十五年やっても走る距離が同じです。そうすると五十歳前後で体質が変わっているのに全然気がつかなくて同じ距離を走るものだから、ある日突然倒れるわけです。アメリカでジョギングを提唱したご本人もジョギングで死んでいますね。だからジョギングが良いとか悪いとかいう問題ではなく、ジョギングに合っている体質かどうか、あるいはジョギングの走る長さで自分の体質が合っているか、そういうふうを考えるべきかと思えます。個々の体質というのは、急には変らない原則がある。しかし、今いったように、変り続けるものであるという特徴がありますね。

考えてみると、個人の集りである民族とか国家とかというものにも「体質」としか言いようがないものがあるような気がします。例えば数年前、『文芸春秋』で「美人重役はなぜ敗れた

淘汰」です。つまり脱脱するのを見ている訳です。そして脱脱しないところから選びます。淘汰して行くのは自然です。アメリカの方は抜擢するのは上役、つまり「人為淘汰」です。人為淘汰と自然淘汰と、どちらが厳しいか、これは見方によります。両方とも物凄く厳しいと思います。

では、どちらがいいかという問題になります。アメリカの人為淘汰的なやり方が悪いわけではない。二百年前のアメリカといったら、インディア人が住んでいただけの荒野です。そこに世界中から食い詰めた人間、と言えば語弊がありますが、その種の間が集まりまして二百年間足らずであれだけの大国を建てました。経済大国であり軍事大国であり、あらゆる意味で大国です。その国の制度、やり方が悪いわけではないでしょう。

では、日本のやり方が悪いか、というと、今から四十数年前、東京に限らず日本の主要都市は全部ぜんぶ焼野原でした。植民地は全部取られ、しかも、戦犯国家、犯罪国家というあらゆる汚名を着せられて、占領されているところから始まり、四十数年にして最強の生産大国であり、史上最大の金融大国になったわけです。その国のやり方が、悪いわけではない。

まあ、それでもアメリカと日本、どちらか優

劣をつけてくれと訊かれたら、それは体質の差ですと言うより仕様がなです。例えば、先輩の経営者の中にもダルマさんのように太ってバリバリやっている人がいます。こういう人達は、えてして脳溢血なんかでコロコロ死ぬのですね。逆さの鶴のように痩せてバリバリやっている人もいます。こういう人はえてして脳梗塞なんかで死ぬのですね。でも、まあコロコロ死ぬのとポキポキ死ぬのと、どっちがいいかといつてもはじまらないわけです。これは体質の差で、病気も違えば体質も違う、だから終わり方も違うわけで、よしあしの問題ではないですね。アメリカではアメリカ式のやり方ではないとまずいし、それでうまくいくわけですね。日本は、まあ日本で悪くはない。どっちも悪くないとしか言えません。

だから急に体質を変えようとするの大変なことになる。皆さんもご存じのある中堅企業の社長さんがいらっしやいました。大変教養もある、個人としては大変立派な方で、悪口を言うような人なぞはいなかった。この方は、今から二十数年前、アメリカ経営学に凝っていました。アメリカでその頃流行っていました少数精鋭主義に非常に凝り、マスコミで引つ張りだこだった時期がありました。ところが、企業家、実業家というのは学校の先生や評論家みたいな無責任なものではない。社員を食わせなければ

なりませんから。一方、自分の経営方針である少数精鋭主義をテレビ・ラジオ・雑誌・新聞にぶちまくっているわけです。自分の会社でもそれをやらなければならぬ。それでその方は実行しました。日本中が見ている中で少数精鋭主義をやりました。少数精鋭主義というのは、精鋭以外のその他の人を引き揚げないから少数精鋭主義というのです。

そうしたら少数精鋭主義が、結局は依怙鼻負だったと従業員が怒り出して大騒ぎになり、結局社長が身を引いて収拾したわけです。その後その会社はちゃんとやっていますから、その社長でなくとも良かったのかもしれない。変に体質改善をやるうと思つたら社長の方が追い出されるような始末になったわけですね。これほど日本の体質は強い。

ちょうどその頃、ある経済雑誌がいろいろな会社の人事担当部長に「御社では少数精鋭主義をどう思うか」とアンケートをとりました。今でも記憶に残っていますのは、三菱重工だつたと思うのですが、人事担当の重役さんが「我が社は全員が精鋭でございますので、特に少数精鋭主義とは申しません」と言つたそうです。

私は「うまい！」と思ひました。三菱重工は今でも日本を代表する大企業ですが、さらに二十数年前ですと、大きな会社はもつと少ない時代ですから、いわば富士山みたいな感じでした。

そこに一流大学の秀才だけが集まっているわけです。そこで少数精鋭主義と言ったとしたら、つかみ合いの喧嘩になるか、みんな嫌になつてしまうかのどちらかでしょう。そこで、「皆さんが精鋭ですよ」と言つて、二十五年間、競争から脱落するのを防いだわけです。これは一番賢明な手段・方法であり、また自然淘汰を絵に描いたようにやっているわけでもありません。誰も自分が脱落するとは思いませんから、やはり頑張るわけです。

このように見ますと、色々な国、色々な文化圏にそれぞれの体質が認められるようですが、我々に関係するのは、日本と、その対極にあると思われるアメリカでしょう。一言で言えば、日本のやりかたというのは、いわば「ドン百姓的」だと思います。一方、アメリカは「馬賊的」だと思います。

では、馬賊の特徴はというと、手柄があつた奴には、即座に、みんなに見えるように抜擢しないと駄目なのです。『狼の星座』（著 横山光輝）という劇画があります。これは戦前の小日向白朗という人をモデルにしたものです。この話では日本人の中学生ぐらいの男の子が、事故で親から離れ離れになり、満州——中国東北部の馬賊に拾われます。その子供は、一番下っ端の仕事をさせられているのですが、馬賊がある町を襲つた時に、この少年が大胆にも身軽に

城壁によじ登つて中から門の門（かんぬき）を抜いたものだから、馬賊が入城できた。そもそも城壁を越える時に門を破れないと、馬賊がたくさん死ぬわけです。それで失敗することも多い。少年の活躍を見た馬賊の長が非常に喜んで、「今回はお前のお陰で助かった。死傷者も少なかったし、モノも多かつた。よくやつてくれたなあ、その調子でやつてくれよ」とその場でパツと小隊長にして、今度は手下がつくわけですね。決して「二十五年頑張れ」とは言わない。

そうすると二十代、三十代の本物の馬賊が、中学生みたいな坊やの言うことを聞くかという、ちゃんと聞くのです。馬賊というのは非常に厳しい生活をしているわけです。襲うか襲われるかという馬賊同士の喧嘩や、町を襲うような、ちよつとでも気をゆるしたら自分がやられるという生活です。だから安心感の置場所がどこにもない。強いて安心感を置くとするればそれはリーダー。リーダーが良ければ生き延びる可能性があるし、そこで儲けることもできる。リーダーが悪ければ直ぐ全滅する。だからリーダーを見る目が非常にシビアになる。だから「これはいける」と思ったら「ハイ」ということを聞くわけです。日本人であろうが坊やであろうが全然構わない。命がかかっていますから。その調子で成功して、少年は南満州第一の馬賊になりました。

もつと大きい規模で考えれば、ジンギスカンもそうです。ジンギスカンも東蒙古の一部族の酋長にすぎなかつたのですが、喧嘩があると勝つた人を抜擢するわけです。そうするとあそこに行けば出世すると、人が集まつて来ます。それであつという間に、今のドイツのあたりから朝鮮半島まで領土にしました。ジンギスカンは抜擢の仕方が上手かつた。ジンギスカンの目から見れば、仏教徒であろうがラマ教徒、イスラム教徒であろうが、一切構わない。命令通りやるか否かだけが重要で、ジンギスカンの有名な將軍たちは、身分を見れば元奴隸というのが一杯いました。奴隸であろうと何であろうと、言われた通りキチツとやっているとなぐ抜擢する、というのが騎馬民族型です。

アメリカもそうです。開拓時代は幌馬車部隊で入るわけですから、リーダーの土地勘が悪ければ、ネバダの砂漠の真ん中あたりで干上がつてしまします。それから変な処に入つて行けばインディアンに囲まれて全滅するかもしれない。ところがリーダーさえ良ければ、インディアンが来ても話をつけたり、あるいは撃退したりできる。そういう能力のある人について行けば、いい場所に入植できて、ヨーロッパならば貴族ぐらいの土地を貰えるということになります。その伝統から、ずっとリーダー崇拜が続くんですね。フロンティアがなくなつても、今

度はビジネスの世界に行く。

大統領選挙でも、「我こそは」と党の中で悪口言い合って、最後に残ったのがこの前で言えばデユカキスとブツシュ(※父親)です。選ばれた大統領は、日本ではもうそれに匹敵する権力者はいないほどの強力な権力者となります。例えば、ブツシュが「ニカラグアを潰そう、原爆も使え」と言ったら、きつと明日からでも使います。アメリカでは、大統領の言うことは絶対です。日本では海部総理(当時)が「どこかの国を攻めよう」と言っても「冗談でしょう」といつても誰も言うことは聞かない。アメリカでは、選ぶまでは徹底的にシビアなことを言い合って選び、そのリーダーがすべてを決めるというシステムです。だから企業でも、リーダーはレイオフをどんどんやります。同時に抜擢もものすこくやる。そして抜擢をする人は評判がいい、というわけです。

では日本はどうかと言いますと、根っから「ドン百姓」なんです。日本人騎馬民族論という本をお書きになった先生がいらつしやいましたけれども、あれは嘘です。なぜかと言いますと、その本が出た頃、一度対談をしたことがあります。その本を読んだら、日本の先祖は騎馬型民族だなど思いたくなります。ところが僕はフト、非常に素朴な質問を出したわけです。古事記や日本書記は今の目から見れば厳密な

歴史ではないとはいえ、どこにも馬に乗った偉い人が出てこない。天照大神、つまり一番偉い女神が何をやっているか？ せつせと機織りをやっていた。他の男の神様は田んぼを耕しています。これは百姓ですね。天尊降臨のご神勅も「豊葦原の水穂の国は」と始まります。つまり日本の島に行つて農業をやれということなんです。また、神武天皇以来、馬に乗っていた天皇は誰もいません。天皇のように偉い人は馬に乗らなかったというのは騎馬民族でない証拠です。だから明治天皇が馬に乗った時に、仕えておった女官がはらはらと涙を流して「日本はこれで終りだ」といったというほど馬に乗らない。だから皇室の儀式は農耕儀礼です。例えば大嘗祭は、神武四年に神武天皇が穀物感謝を兼ねてご先祖様に報告をしたことが起源だそうです。その儀式が天皇即位に係わる神事として、比べるものがない尊いお祭とされてきたわけですが、これは完全にもう農耕儀礼です。

その儀式を見ますと、先ず新しく天皇になる方は、伊勢の内宮、つまり天照大神から天津日嗣(あまつひつぎ)、お日様の位を貰う。これは比較的簡単な儀式です。また、稲の穂の位を貰うわけです。太陽と農業の両方の神秘的な力を受ける。これが日本の天皇なのです。

伊勢の外宮の神様は豊受大御神(とようけのおおみかみ)と申しまして、丹波の国から来ま

した。丹波というのは昔から、豆とか栗とか、たいへんいい物がとれるのです。だから丹波の神であったものを外宮にまねいたのでしょう。その系図を見ますと豊受大御神の親は稚産靈神(わくむすびのかみ)と言います。さらに稚産靈神の親は、罔象女神(みずはのめのかみ)と言います。罔象女神は伊邪那美命(いざなみのみこと)の尿から生まれた神といわれております。どうして尿から神が生まれたのか。皆さんは余り知らないでしょうけれども、家庭菜園をやった人には分る。私もやりましたが、田舎のことですから「大」の方は百姓に渡して、代りに米や野菜を貰う訳です。「小」の方は家庭菜園で使つてもいいという不文律がありました。ところが、そのままかけると濃過ぎて根がだめになるから水で薄めてかけるわけです。水割りにしてかけますと、日本は土地がいいですから、植えた野菜が実に瑞々しくなります。正に「みずは」です。更にかけて続けますとササゲでも瓜でもナスでも「湧く」という感じで出てくるんですねえ。まさしく「わくむすび」です。その結果は「とよ」は豊か、「け」は食べ物という意味ですから、豊かな食べ物ですね。だから家庭菜園をやつて御覧なさい。伊勢の神々の系図が目の前に見えますから。

ところで、イネというのは日本で一番重要な植物ですが、稲科の植物というのは稲科の雑草

と区別がつきにくい。稲科の植物と雑草を区別するにはどうしたらいいか。古代の人は簡単です。肥料をやるかやらないかなんです。肥料をやらないと、ただ伸びるだけです。肥料といっても自分の家の排泄物をかけるわけです。そうすると稲だけは、うんと実って稲穂が垂れてくるわけです。稲科の他の雑草は伸びるだけ。だからそのおしっこの中ですね、何か特別な稲を稲たらしめる力があるのではないか。これは、日本の概念では神様ですね。しかも、同じおしっこでも女神のおしっこというのが意味深長で、やはり生殖信仰がありますね。

それぐらいですから、大嘗祭の時に豊受大御神を食べるという儀式をやるわけです。「悠紀(ゆき)」「主基(すき)」の「斎田」を選定して、そこからできたお米で、ご飯を炊き、酒を造って、それを新しく天皇になれる方が食べたり飲んだりするわけです。これは象徴的に、豊受大御神を食べる・飲むということ。似たようなことはカトリックでも、ミサでキリストの体・キリストの血を飲んでいきます。同じような発想で日本でもやっていたわけです。これは、五穀豊穰を司る神の力が入ったということ。で新しい天皇の資格になるのです。

だから日本は骨の髄まで百姓で、だから天皇も田植えをするわけです。先進国でこういうこ

とをする国はありません。先進国というのはヴエブレンの『有閑階級の理論』が通用する世界です。偉くなるということは、労働をしないことであり、手を汚さないこととされています。オクスフォードで、なぜギリシア語を教えたかといいますと、ギリシア語は絶対に役に立たないものなので、役に立たないものを若い時に勉強するぐらい、家庭が豊かだと誇示するためです。それから、白いテーブルクロスというものがあります。なぜ白いのを使うかというと、いくら汚れても元に戻せるだけの女中がいるということを示したいわけです。ナプキンも、ほんとはすぐ置いて片付けさせる。ところが包んでいる場合があります。あれはイギリスでは、ローワミドル以下です。女中がないから三日に一度ぐらいでナプキンを洗うわけです。ところがアッパーミドル以上は、人手は幾らでもありますよと誇示します。例えば女の人が爪を塗りますが、あれば水仕事はしなくてもいいといたいわけです。要するに働かないことを示すことに情熱を燃やすというのが大体の社会です。

ところが日本だけは、天皇も泥に入り田植えをします。だから働きすぎなんて言われても仕方がないですね。ドン百姓社会だから。

そのドン百姓社会の特徴は、安心感が地面の上にあるわけです。猫の額みたいな処を耕して

も食べていける。これが二千年間続いております。日本の土地というのはご存じのように世界でも掛値なしに豊穰な土地です。ヨーロッパだって、近代の化学肥料ができるまでは、大体三年か五年に一度しか麦を蒔けません。一度蒔けば翌年は休耕し、その次は牧草地にして地力を回復してからまた麦を植える。しかし日本は毎年やっているわけです。それはもう大変な回復力です。これだけの人間がこれだけの小さな島に住みながら、二千年間禿山を造らなかつたということは、やはりたいへんに植物が生えるからです。ですから、猫の額があれば食べていける。更に外国ですと、一生懸命真面目に仕事をして、移民族が他所から来て自分の村がそっくり奪われるようなことがあったわけです。ところが日本はそんなことは民族の記憶に及ぶ限りではありません。となると「猫の額を耕しておけ」という考えになるわけです。

そもそも猫の額ぐらいの土地ですから、能力の差がつけようがない。平均的な人の三倍働ける人と平均的な人の半分ぐらいの人の能力差は、六対一です。その差が、昭和二十年頃までの日本の農業において差が出るでしょうか。絶対に出ません。しいて差をつけようとするれば真面目にやったか否かということです。真面目にやっても、できる米の味には差がない。すると、どこにも差のつけようがない。だから能力の差

はないということが前提になってしまします。つまり土地にしがみついているれば食べる、だからリーダーはいらない。あるとすれば天変地異で、六十年に一度ぐらい飢饉があつたりしても、一生のうち一度あるかないかですから、それはなるべく早く忘れましょう。だから「天災は忘れた頃にやってくる」ということになり、まずそうしますと、日本の体質の特徴として、まず能力の差はない、よってリーダーはいらない、そして安心感地面の上ということになります。そうなるとう子供の教育も変わってきます。

第一に、リーダーはどう選ぶか。ほんとはリーダーなんて要らないと皆が思っている。それでも村があれば、村の一番頭、名主が必要になるわけです。ではどうするのかというと、明治以後でも、要するに痛に障らない人にリーダーになって貰えばいいわけです。どうせ潰れないのですから。

では、どういう人が痛に障らないか？ その村で一番古い人です。古いということは痛に障る要素を消すことなのです。日本では、東京という集落の真ん中に天皇が住んでいらつしやいます。でも、あんまりやきもち焼く人はいませんね。やきもち焼くどころか、緑が多くていいとか、周りをジョギングするのにいいとか、かえって喜んでる人が多いようです。ところが、戦後の頃に越後から出てきた人が屋敷を造

つて、池を造つて錦鯉飼つたりしたら、日本中がカリカリする訳です。何故でしょうか。天皇家は大体二千年ぐらいい続けている。もう一方は四、五十年前です。つまり古いということは嫉妬心を消すようです。

二番目です。しかし、村に古い家が二、三軒あることもある。あるいは一軒きりしかなくても、子供が何人もいる家がある。その場合、年の順となります。これでは喧嘩の仕様がなない。だから、田舎で寄り合いがありましても、上座に座るのは年の順というのが一番無難です。もし金のある順だとか能力の順ですと、つかみ合いの喧嘩になります。だから日本で、能力順に並べてもいいのは相撲の番付だけです。では何故、相撲を国技というか。あれは農耕的な日本社会においては、絶対他でできないところを見ることができたから、気持ち良かったのです。日本社会と異質だったから、みんなが拍手喝采したわけです。日本社会では身分は動きません。ところが相撲だと番付通り、しよつちゅう動いている訳ですね。例外として横綱をつくつていきますけれども、大関だつて、もつと頻繁に落ちるような方が、国技の主旨にかなうわけです。それから第三番目は、お祭の寄付です。能力はいらないけれども、お祭の時ぐらいいは他の人より沢山出して貰いたい。だからある程度、金がないと駄目です。お祭の時に他の人より沢山

出せる人。

この三つが揃うような、例えば古い家で、年寄りで、お祭の時はお金をポンと出す人がいましたら、村長としては最も理想型です。どうせ村には大きな事件は起りつこないし、誰もそんなものに嫉妬しない。だから雰囲気平和です。ところが村の村長選挙に五十代、四十代の油ぎつた奴が二人立候補すると、能力で争うことになり、村が割れます。もう村中が喧嘩になつて居心地が悪くて仕方がない。それで結局、あそこの爺さんにまた出てもらおうとなるんですね。すると村はまたのびやかになるという仕組みです。

農村社会ですから、親が子供を教育する時も嫌われないような子供をつくろうとする。「能ある鷹は爪を隠す」と教えます。子供が「俺は能はあるな」と思つても「爪を隠さなくては」、と能を隠す訳です。隠し隠して四十年、今度は爪を出そうとしても出なくなるんですね。では始めから能がない奴はどうか。能を出さないと、能が無いのは、結局同じです。これでみんな安心するわけです。これこそが農村社会の特徴です。これが日本を、神代から規定してきました。

ところが、長い日本の歴史の中で、例外というものが時々起りました。私の観察するところ、

三回ありました。それは戦国末期です。戦国以前も、馬に乗った武士が出てきますけれども、源氏も平家も武装百姓です。源氏も平家も、基本が武器を持った村の衆だから、必ず誰かを担がなければならぬ。源氏の御曹司はいつでも大将であつて、源氏の後見人は、幾ら有能でも大将になるわけにはいかないのです。これはもう決まりなのです。それで、大体、土地争いで隣の土地と喧嘩するわけですから、一所懸命つまり「一所に命を懸ける」となります。やはり武装百姓なのです。

ところが戦国末期には、本当の騎馬型になっています。応仁の乱は、他の日本のすべての戦争と違う。それまでの日本の戦争はみんな短くて、長いのも七、八年です。平家が源氏を潰すのは半日。源氏が平家を倒すのは三年数ヶ月で、常に戦争は短い。応仁の乱だけは、十年たつても二十年たつても終らず、結局百年以上も続きました。日本中が隣と隣で争い合つて、殺し合う時代でした。末期に入つてから、北から伊達正宗、織田信長、南なら毛利元就などがよくやく我々の視界に入ってくる。あの前後七、八十年間は、休みなしに殺し合つています。そうすると無数の浪人も出ます。そうすると、能力がない、出来の悪い殿様についたら堪らないということが良く分ります。というのは戦で負けて戦場から逃げると、待つてましたと言わん

ばかりに百姓が襲いかかつて落ち武者から剥ぎ取り、殺して、腹を裂いて肝、つまり胆嚢を獲るんです。熊の胆嚢を「熊胆（くまのい）」といいます。乾した熊胆は金と同等重量交換です。人間の肝は金より高い。だから落人一人で大変な現金収入となります。それから剥ぎ獲つたものは武器マーケットが、戦国時代、ずっと続けていますから常に売れます。しかも大量生産制度がないですから、常に売手市場です。そうしますと百姓にとつてみれば、猪を捕まえるよりはずっといいわけです。猪を捕まえるのは危ないし、捕まえたとしても、村中集まつて一回猪鍋をやれば終り。敗残兵を捕まえて殺しますと現金収入が上がる。だから戦争があると、みんな戦争見物をするわけです。そして女子共はどこかに隠す。これもちゃんとノウハウがあります。屈強の若者だけが戦争見物をやるわけです。半日ぐらい戦があつて、勝つた方が戦場に

に残る。勝つた方には危ないから手は出せない。負けた方は疲れ果てて逃げて行く。そこで見物人が突如ハイエナになります。だから戦国後半以後、日本の武士は負けることに臆病です。源氏、平家、鎌倉時代でも武士というものは主人が死ぬと、皆死ぬと決まっているから、死ぬことを怖れない。ところが戦国の武士は、戦場が維持できなくなつたことが分るやいなや、途端に臆病になる。だから、豊臣秀吉が明智光秀と

山崎で戦いました。これは午後三時頃から始まり、それから二時間後、戦場が維持できなくなったことが明智方に分ると、明智方は当時一万四千人ぐらいの軍兵ですけど、そう大して死んだ訳ではない時点で、例えば四千人ぐらい死んだとして、まだ一万人ぐらいはいるにもかかわらず、戦場維持は難しいと分つた途端に、この一万人余りの軍兵達が、天に昇つたか地に潜つたか、パツと消えてしまった。だから光秀は落ち武者狩りの竹ヤリで殺される。こういうことは戦国以前の戦争では絶対ありえません。

源義経が死ぬ時は何十人もの武士が一緒に並んで腹を切りました。天下分け目の関ヶ原とは言いますが、負けた方の大将は、手下が皆逃げから、捕まるに決つてゐるわけです。それを裏返しにすれば、武士たちが、リーダー選びを非常にシビアにやつたということです。だから殿様の方も、能力でバンバン抜擢して、最後は抜擢の上手い奴が勝つ。その天才は秀吉です。秀吉の抜擢の仕方は凄いい、あつと言つて天下を獲つた。ところが家康の時代になりますと、意識的に騎馬型社会から百姓社会に完全に戻しました。だから秀吉は、「鳴かぬなら 鳴かしてみせよう ほととぎす」で、家康は「鳴くまで待とう ほととぎす」だと、ほととぎすの話にあてて、性格が違うということを言つた歌ですが、もっと重大なことは、秀吉のつくつた

時代は、能力社会で、しかも騎馬型と言ってもいいものになっておりました。だから役に立つものは何でも偉いというわけです。町人も拔擢され、小西行長のように本物の大名にした者もいます。しかし、戦争したくない商人もいるわけですし、商売させた方が有能な場合、秀吉は名義上の大名とするわけです。だから茶の湯で堺の町人と前田・徳川という大大名が同じ席で茶を飲んでいるわけです。なぜそういうことができたか。あれは、石高はないが、十萬石大名、五萬石大名という金のかからない大名にしているわけですね。そうすると堺の商人でも、私は十萬石の待遇を太閤から貰っていると言えば十萬石の大名と対等に付き合うことができた。こういうことは能力社会の典型的なものです。秀吉はそうやったわけですが、家康はそれを意識的に百八十度変えました。朝鮮の影響もありますし、能力主義の落ち着くところが分ったからですね。徳川政権では、庄屋仕立てで日本を治める、庄屋が村を治めるように日本を治める、ということをやりました。だから能力は一切要りません。土地の相続は長子相続、相続争いだけ起きなければ、とり潰される怖れはまずない。だから有能な大名である必要はない。鼻垂らしで結構、変に有能でお城を造りたがると、却って潰されるといことです。能力は一切要らないという建前にしてしまつた。それで、も

ともと全部が百姓的ですから、偉い殿様、将軍が出て潰れないが、バカな殿様が出て潰れない、また中ぐらいいも潰れない。つまり誰が出て潰れない。というのは上の方を見て下の方の人が不満に思い「あの殿様は馬鹿だ」と言つても「そんなの決まつてるよ」で終りになつてしまふ。だからそもそも話にならんです。だから絶対安定していた。

そこに黒船が来ました。日本人には黒船の意味がすぐ分りました。ボヤボヤすると日本は植民地になる。そうすると家康がたてた原則がいつぱんに成り立たなくなりました。家康の立てた幕藩体制の原則は、日本中が、村のように、仲良くやつていけば相続は保証される。安心感には百パーセント地面の上にあるというものです。

ところが、安心感のよりどころであるその土地を植民地にする勢力が現れたのが黒船です。あの大清国を阿片戦争でメタメタにしたイギリスが来る、北からはシベリアを通つた奴が来る、太平洋からはインディアンから国を獲つたアメリカが来る。その危機感たるや大変なものです。

では、明治維新がどうして成功したか。諸々の理由はさておき、根本は、幕藩体制はもう成り立たないということとを皆が分つたからです。

安心感を地面の上に置くことはダメになつてしまつた。だから明治維新が起るやいなや廃藩置県をやつて大名から土地を取りあげた。大名は土地を取られたくないし、武士だってやめたくない。ところが当時の政府は、殺し文句を持つていました。「大名が土地を持つていたつて、日本が植民地にされたら終りですよ」と。日本自体を取られたら終りですから、この殺し文句は効きました。しかし国を取ろうとする奴がまわりにたくさんいるわけですから、日本は一挙に実力社会になりました。

また実力が奮える社会になり、明治維新の短期間に偉い人が出まして、コロンプスの大陸発見四百年目にして、有色人種に、独立国、近代国家が生まれました。これは有能な人をどんどん登用したからです。

ところが日露戦争で勝ちすぎたものだから、再び日本人は百姓根性が戻つて来ました。何でも順番になつてしまいました。陸軍でも海軍でも全部順番。大学・学校、陸士官学校に入つていた成績が卒業後の何十年もついてまわつた。だから日露戦争より後で戦争が上手くて偉くなつた軍人なんていません。皆、順番とペーパーテストでやつていければ日本は潰れっこないと思つているのですから。潰れるわけがないと思つて、外交も粗末になる、ということと、この前の戦争になつた訳です。戦争になつたら、

神州不滅と言っておったけれども、いつこう不滅ではなくて、負けました。神州不滅というのは日露戦争以後出た発想です。維新の時は、明日にも植民地にもなるかも知らんというその怖れだけでやってきた。ところが日露戦争で勝ったら、日本は無敵だとすっかり安心して、神州不滅と思い込んだ。そして不滅である以上はなるべく先刻言ったように、争わないようなシステムがいいわけです。だから大東亜戦争の時、日本はシンガポールを占領して昭南島と書いておりましたけれども、そこに南方方面の司令官の基地・本部がありました。その南方方面陸軍派遣最高司令官の寺内さんという偉い方ですが、この方はどういう方だったかというとお父さんも寺内正毅という元師で、その息子だった。だから名門です。それから二二六事件の時に、大将が皆退役になったなかで三人だけ大将を残した。その三人のうちの一番年上だったから、陸軍の現役では一番でした。古い家で年上で、それから坊っちゃん、親も公爵だから金がある。気がよくて、お祭でなくても、飲む時に金を出す。しかも最高司令官になった時はボケが始まっています、何でも参謀の言う通りにしていた。まさに村の名主を選ぶように人事が進行した訳です。だから勝つ訳がない。

では敗戦後はどうであったかと言いますと、

これは誰が工夫したわけでもなく、無数の株式会社ができました。これが戦後日本の、社会の体質を説明するものだと思うのです。株式会社ですから、なかなか潰れない。商売は、し損ねたら潰れるから能力主義でもありますが、中で働いている人は、神代以来の農耕的な精神が旺盛な人が一杯いるわけです。だから「順番待ちましょう」とか、「二十年間やればいい」というわけで、スタンド・プレーはやらずに地道にやる。義理堅くやる、となった。だから日本の戦後社会の特徴は、無数の株式会社です。今まで話した用語を使えば、「枠組み騎馬型的な百姓」という社会ができてしまったわけです。どんな会社でも潰れる怖れはあるから能力主義は決してなくならない。しかし中で働いている人はアメリカみたいに抜擢に次ぐ抜擢なんてないことは知っているから百姓的にいきます。この非常にユニークなコンビネーションが、誰が計画したともなくできました。これが今の世界の情勢において、大変上手く機能しております。

一方、アメリカではこれまでのやり方が、あまりうまく機能していないようです。騎馬型になりすぎると、有能な人にはいいのですが、そうでない人も一杯いる訳です。ジョンソン大統領の頃までは良かったですが、ベトナム戦争以降、社会福祉ができてきました。

そうしますと、比喩としては悪いけれども、アメリカの社会の下半分は「食いつばぐれな」という精神になっています。これは日本の村と同じで、潰れるわけがないと思っっているのです。僕が最初に留学した頃は、アメリカでかわいそうなのは黒人であり、さらにかわいそうなのは黒人の女性、もつとかわいそうなのは父無し子を抱えた黒人の女だと言われていました。ところが今は父無し子がいても食うに一向困りません。だから結婚届けを出さないというのが流行っております。というのは結婚届け出さないかぎり、みな父無し子ですから、社会保障の対象です。また、今アメリカで、十代の女の子が、非常に子供を生みます。みんな育てたがっている。なぜかという未婚の母という社会保障が入るわけです。結婚しているとかえって食えなくなるというわけで、非常に多くの人達がそういう発想になっているようです。だからアメリカの底辺の人達は非常に和やかで、のどやかな気持ちになって、我が世を謳歌しています。

上の人だけが頑張りますけれども、これはアメリカでは体質変化が起ったのです。それなのに上の人たちは、昔のまんまのアメリカだと思っっているから、頑張れ、走れと言っています。しかし下の方はそうではない。一番いい例は、前のサミットでベイカー國務

長官がドルを切り下げた。あれは簡単な話で、日本の輸出産業を潰すつもりでありました。ドルを切り下げ、支出を抑えて、レーガノミックスはうまく行くはずだった。ところが現実には、税金は下げる、ドルは下げるで、切り下げできなかった。そうすると、この人たちは節約する気なんか余りないらしくて安い物を買う。すると日本も切り上げには日本式に対応して、非常に技術革新をやりまして、全然困らないということになりました。

だから、ベーカー國務長官をはじめとする多くのアメリカ人の間違いは、アメリカの体質が変わったということをも十分認識しないで、昔の流儀でやろうとしていたというところにあります。日本の体質は、今の状況では非常に良く働いておる。というのも、昔ならばフォードが一人で自動車会社を起すことが出来た時期がありました。同じようにエンジンが一人でいれば蓄音機会社ができるというような、天才のワンマンプレーで何でもできる時代がありました。

しかし今は、カメラ一つ造るにしても、光学レンズの材料、エレクトロニクス、デザインなどの要素が仲良く調和し協力して長年間やらないと出来てこないわけです。そういう場合は、日本の枠組み、「枠組み騎馬型、中は百姓」が大変上手く機能していると思います。この調子

で、当分行くでしょう。

そして、これを真似たところは大体うまく行くらしいことは韓国・台湾、及びアジアでだんだん分ってきたわけです。日本と同じようになれば百万長者になれる、だから反日運動も消えてきました。だから当分は日本式でいいと思います。やはり枠組み騎馬型だけでも中は百姓では嫌だという人もおります。この人をいかに上手く活かすか、が問題だと思います。

例えば、最近、研究社の辞書の悪口をいう本ができました。評判になったから御覧になった方もいるかも知れませんが、この人は代々木ゼミナールの先生です。早稲田を出て三年半ぐらい銀行に勤めてからロンドンで働いて帰ってくる。辞めて帰ってきたら日本ではなかなかまともなところには入れない。しかし代ゼミに行くくと、能力さえあれば幾らでも高い給料が取れる。そして既成の権力ともいえる研究社の辞書や大学の教授らのどんな悪口でも言ってくれる。

私はこれは非常にいいことだと思っております。大体、日本は枠組みで進めるのだけれど、そこからはみ出た人もいます。そうになると、それをも活かすような、柔軟な余裕が必要だとは思っています。しかし、当分のあいだは枠組み中心の世界に諸君は入って行くし、このシステムは、戦後の日本において十分証明されたところで

あります。

皆さん方が、枠の中で、企業の中で二十五年間、自然淘汰に堪える決心をするか、あるいは堪えない決心をして人為淘汰のところ飛び出るか、そういう選択が残されているとは思いますが。以上、何らかのご参考になれば幸いです。長時間、ご清聴有り難うございました。(拍手)

※当DVD収録のご講演録には、現在では不適切と思われる表現が用いられている場合がございますが、講演時の時代背景等を尊重し、当時のままといたしました。